

## Bさんのケース

Bさん(女性)は、1945(昭和20)年、九州地方生まれ(聞き取り時点で59歳)。3歳のとき、父親が菊池恵楓園に入所、母親はBさんを置いて別の男性と再婚した。Bさんは「両親のいない子」として、小学校4年までは父方の祖父母のもとで、小学校5年からは母方の祖父母のもとで暮らす。このかん、近親者からは「冷たく」扱われた。父親がハンセン病にかかって療養所に収容されたことを、まわりの近親者はみな知っており、Bさんだけがそのことを知らされていなかった。「亡くなった」と聞いていた父親とは、結婚後、24歳で再会することになる。

聞き取りの場面で、Bさんは、聞き手の問いを待たずに、一気に成に話しだした。後遺症がひどかったためもあって父を父として受け入れられなかったこと。自分が近親者から「冷たく」されたとおりに、父親に「冷たく」接してしまったこと。自分の不幸の原因を父親のせいにして、父親を「恨み」つづけたこと。Bさんの胸中には言いたいことがたくさんつまっていたのだろう。

子どもは、息子1人と娘2人。現在は夫とのふたり暮らし。

### 「亡くなった」と聞いていた父親と24歳で再会

Bさんが24歳、長男が生まれた後に、はじめて、父親の健在であることが母の口から知らされる。菊池恵楓園での父親との21年ぶりの再会について、Bさんは、つぎのように語る。

《Bさん》そのとき、母から「父親が生きてるよ」という言葉が、ちょっと出た。それまでは全然、父親というのは知りもしなかったし、「亡くなってる」と聞いてたからですね、「なんで〔いまになってそういうことを言うの〕?」って。「いない」となってるのに、いてるっていうのはおかしいでしょ。そしたら〔母は〕「いや、子どももできたし」。結局、母は父に〔わたしと子どもを〕見せたかったのか、ちょっと〔よくは〕わからないんですけど。「どこに?」って言ったら、「恵楓園っていうところ」って。わたしは、その名前も知らないし、意味が全然わからない。「恵楓園って、どういうところ?」そしたら「病院」って言うからですね、「病院って、どういう病院?」って。「行ったらわかるよ」と言うから、ああ、そうねと思って、気軽に、来たんです。

ここ〔=恵楓園〕の入口に行って、父親の名前を言ったんです。そしたら〔職員が〕「いや、そういう方はおられません」と言われる。〔父がここにいると母から聞いてきたと言ったら〕そしたら、「誰のことだろう」とって、パーッと、なんか事務所のほうに行って調べたみたいでした。そして「Sさんじゃないんですかね?」っておっしゃる。「えっ、ここは病院なのに、どうして名前もちがうんだろう」とって思った。「もし

かしたら、Sさんじゃないかねえ？」「いや、そういう名前じゃないです」。そして何分かして、わかったんでしょうね。病棟に〔連れて〕行かれたと思うんです。そうして行ったら、「あの、来られましたよ」って言われる。「おたくは、なんにあたるんですか？」って他のひとが聞かれるから、「あの、わたし、娘です」って言った。娘が生きてることも、全然、話してないらしくて。わたしも、いきなり行ったから。父親も3歳のときに別れてるから、お互い、どっちもわからない。「父親です」って紹介されても、どの人が父親なのかわからないんですよ。ただ、「この方がSさんです。この人がお父さんですよ」っておっしゃった。わたしの〔結婚前の〕名前はIというんですから、「いえ、なんか、ちがうんじゃないんですか？」と言ったんですよ。

やっぱり、ほら、普通の病気でない。普通のお父さんと思って、わたしは行ったんですよ、期待して。そして、やっぱり見たときに、わたしの言葉から言ったらいけないんですけど、もう、見たとき、子どもをだっこして抱えたときに、頭もはげて、顔かたちも変形して、手〔の指〕もなくて、なんか、包帯巻いてたんですよね。“えっ、この人がわたしの親？”って、そのとき。それっきり、言葉もなかったです。そのまま何分経ったか、ちょっとわからないですけど。もう、そのまま。歩いて行って、どこかでタクシー拾って帰ったんです。

やっぱり“嫌”っていうのか、自分の想像した父親とは全然ちがったから。“なんでわたしは、こういう人から生まれたんだろう”っていう〔思いで〕頭がいっぱいで。見た瞬間、はっきり言って、悪いですけど「化け物」って、そう思って帰ったんです。

こうした父親との再会によって、「そのとき初めて」、子ども時代の、まわりからの自分の扱われ方の意味がわかったという。「小さいとき、親戚のうちに行っても、なんとなく、あしらいがちがう。やっぱり、子ども心にわかるんですよ。大人になって、初めて、親を見たときに、自分の親がどういう病気だったっていうことを〔理解して〕。だから、そのあとも、ずいぶん悩んだです」。

次節からは、Bさんのおいたちを子ども時代から追っていこう。

### 父方、母方をたらい回しにされ「投げやり」に

Bさんが3歳のとき、父親は恵楓園に入所し、母親は「わたしを置いて、ほかの男性と結婚した」。幼いBさんは、小学校4年までは父親の実家に、5年生からは母親の実家に暮らすことになる。

《Bさん》そっちを行ったり来たり、こっちを行ったり来たりするみたいな感じ。母親がいるっていうこともわからなかったし。母親も、自分の記憶にないんですよ、大きくなるまで。だから、じいちゃんばあちゃんが、わたしにすれば、親と思ってたんですよ。

《聞き手》おじさん、おばさんは、あんまりあったかくしてくれなかったの？

《Bさん》そうです、はい。遊びに来れば、襖をピシャッと閉められたりとかって、そういうの。言葉には出ないけど、なんか……

《聞き手》邪魔者扱いみたい？

《Bさん》うん。畑のなかに、2軒あるでしょ。じいちゃんばあちゃんのうちから、隣の〔お婆の〕うちに行けば、「あらぁ、なにしに来たぁ」とかって、そういうふうな態度。ある程度大きくなって、学校も出てたときに、遊びに行くと、〔お婆が〕「あんたがこまかかったときは、来ると、みんな、嫌だったもんねえ」って言うんです。「なんでえ？」って言ったら、「あんたが帰ったあとは、箸を投げたり、茶碗を投げたり、してたもんねえ」って言われたけど、意味がわからないんですよ、わたしは。

《聞き手》茶碗を投げた？

《Bさん》うん。やっぱり、汚いってことでしょうね。それを言葉に出してくれればいいんですよ。だけど〔訳を〕言わないから、自分にすれば、なんのことかわからない。全然知らなかったから、なにをされても、冷たくされても、もう、そういうもんと思って育ってる。〔24歳で〕父親を知ったとき、“あっ！”って、そう思ったんですよ。いま思うと、あ、そういうあれだったんだね、と。

《聞き手》小学校5年で、今度は、お母さんと暮らしたわけじゃなしに、母方の？

《Bさん》そうです。おじいちゃんおばあちゃんと。お婆さんとかが一緒にですね。

《聞き手》母方のほうでも、また、冷たくされた？

《Bさん》やっぱり、わたしの父のことを知ってるから、口には出さずに……。

Bさんは、学校を出たのは中学校まで。「もっと上まで行きたいと思った。好きなことも、したいと思った」けれども、それはかなわなかった。「やっぱり、わたしのまでは、まわらんかったんでしょう。母親から養育費出るわけじゃないし。じいちゃんとばあちゃんが、自分の子どもを大学までやってったら、けっきょく、わたしのまでは、まわらなかった」。

《Bさん》〔上の学校へ〕行きたいと思いましたよ。好きなこともしたいと思ったですよ。だけど、やっぱり、自分も投げやりになって。“行っても行かんでもいいや、学校は。中学校も出らんでもいいや”って思ったことも、なんべんかありました。途中で投げ出して、ほんと、行かなくて……。ほんと、お恥ずかしいことに、警察のお世話になったこともあります。家出も何回もしたこともあるし。でも、やっぱり、中学だけはちゃんと出とかないかんよって言われたけど。

ほんと、車の免許も持ってないし、なんにも持ってない。手に職も持ってない。

中学卒業後は、「こっちにいるよりも、そばを離れたほうがいいだろうということで」京都の染物会社に勤める。3年ちょっとたったころ、「やっぱり、おもしろくなくなって」

九州に戻ってきた B さんは、ふたたび親戚のもとを転々とする。「帰るとこってないでしょう、わたし」。18 歳のころには、再婚した母親のもとにいた時期もあった。「1 年ぐらい〔母の〕家にいたですかねえ。だけど、やっぱり〔母の家族とは〕折り合いが悪くて。そしてまた、じいちゃんばあちゃんのところに行って、おじさんのところ泊まったりして」。

友達の紹介で「夜のほうのアルバイト」を始めたことをきっかけに、現在の夫と知り合う。「行ったその日から、主人と、はじめて会って」。22 歳のときに結婚。そのときは「一か八か、どうでもなれやっという」気持ちだったという。

「〔主人とは〕30 何年のおつきあい、してますよ。だから、結婚してからのほうが幸せなんです、わたしは」と語る B さんだが、結婚のさいには、やはりいくつかの壁に立ち向かわなければならなかった。

### 結婚に反対される 母親からも相手方からも

結婚するときには、母親からも、夫の家族からも反対を受けた。

《B さん》結婚するということで、母のところに行ったんです。結婚すると言ったら、母はいい顔をしなかった。「結婚すっとはいいけどね、まちがった子を産まんことしたらいい」って、母がそんなふうに言うたんです。意味わかります？ わからないでしょ。なんか、当てこすりなのか。自分の親からそういうこと言われるからですね、わからなかったんです。

3 歳のときに B さんを置いて出て行った母親。「母親も、やっぱり、わたしの父を偏見で見たんだろうと思う」。父親との再会を果たしたあとで、母親に、「『なんで別れたと？』って聞いたら、結局、『まわりから、汚いとか、うつるとかって聞いたけん、別れたったい』って」言ったという。B さんにとっては、「実の母親から、『あんたの親は汚い』とか、『うつる病気』とかって言われたのが、いちばん嫌だった」。

《聞き手》だんなさんのほうの家族も、反対したの？

《B さん》反対しました。名前がちがうから。わたしは父親の名前でしょ。母はちがう名前でしょ。結局、調べられたんでしょうね、結婚するとき。そしたら、やっぱり、主人のほうの家と、わたしの家の家柄がちがうということで、反対された。主人のきょうだいは 7 人か 8 人がいますけど、そのなかの 2、3 人ですかね、結婚式に来てもらえなかった。

24 歳での父親との再会で、「アッ！ あおときは、ああだったのね、と」思ったという B さん。背景には、「意味がわからない」ままに歩んできた、こうした不遇の生い立ちがあった。

### 「主人のほうが親子みたいな感じだった」

父親との再会后、Bさんの家は、「〔団地が〕当たった」ことで、恵楓園のそばに引っ越してきている。しかし、Bさんがふたたび恵楓園を訪れるまでには、「2、3年」の月日を要した。

《聞き手》2、3年たって、もう一度、会いに来られたのは、どうして？

《Bさん》主人が「行こう」って言ったんですよ。

《聞き手》そうすると、だんなさんが、Bさんのお父さんがここに入ってるっていうのを知ったのは、いつ？

《Bさん》結婚するときに籍を見てるから、親が生きてるっっちゃうことは、わかるでしょ。戸籍抄本を取るでしょ。父の名前が載ってますでしょ。そのとき、わたしの親が生きてるってことがわかったそうです。

わたしが会いに来てから2、3年たったときに、なんかのきっかけで、「親が生きてるんだらう？」と言うから、「うん、そうよ」と。「どこにおる？」って聞いたから、「恵楓園っていうところに、いるみたい」って言ったんです。「会いに行った？」って言わすけん、「うん、行った」。そしたら、「おまえの親なんだから、〔わしも〕会いに行ってもいいとやないか」って言ったんです。だけど、自分が想像してた親とちがうから、主人には見せたくないっていうのが強かった。もう、どうしよう、どうしようって思って、悩み続けて。けど、主人が「親が生きてるとだけんな。会いに行っても、べつに悪いとやないのぉ」って。そういうふうないきさつがあって、ここ〔=菊池恵楓園〕に初めて〔夫婦で〕足を踏み入れたんです。

部屋に通してもらって、お互いに、親子の名乗りをして。「娘婿です」と言ってあれして。だけど、わたし、いたくないのと、主人に〔後遺症のある父親を〕見せて、「はたして」自分と子どもたちがどうなるかっていうことだけが、頭いっぱい。もう、なにを話したかもわからない。1時間ぐらい経って、家に帰ったと思うんですよ。わたしも興奮状態になってるし、尋ねたんですよ。「どうだった？」って言ったら、「親に代わりないんだけんね」って、主人が。ああ、そしたら、べつに心配するようなこともないのねえ、って思ってたんです。

その後、夫は、子どもを連れて恵楓園に「しょっちゅう」出かけるようになる。また、Bさん宅に、父親が遊びに来ることも、たびたびあった。「わたしよりも主人のほうが、親子みたいな感じだった」。

《聞き手》お父さんは、どのぐらいの頻度で、お宅へ遊びに来られてたんですか？

《Bさん》1ヵ月に2回ぐらいですかね。

《聞き手》けっこう頻繁に、いわば楽しみにして来たわけですねえ？

《Bさん》みたいですねえ。孫と会うために。月2回ぐらい来てたと思います。主人とも、遊びに行ったり、旅行に行ったり。福岡の先の、壱岐ってありますよね。あそこに、何回か行ったことあるんです。ここ〔＝菊池恵楓園〕の人と3、4人ぐらいですね。友達かなんかいるんでしょうね。そうやって、主人が車で、運転したり。

《聞き手》みんなを連れてってやるのね？

《Bさん》はい。

《聞き手》すごいボランティアじゃない？ だんなさん？

《Bさん》だから、わたしより主人のほうが〔父親は好きでした〕。〔ただ、夫は〕しゃべりません。だいたい、しゃべる人じゃないからですね。無口だから。

### 自分がされたように今度は自分が父にした

いっぽうで、Bさん自身は、父親にたいして複雑な気持ちを抱きつづけた。「わたしは、ほとんど、病院〔＝菊池恵楓園〕のほうには行かなかった」。そして、みずからの不遇の生い立ちを背景にして、「自分がされたことを、今度は、わたしが、親にした」と語る。

《Bさん》〔自分は、父が〕亡くなるまで、冷たくあたって。「病気であって、なんで、わたしみたいの産んだの？」って、責めることばかりで。

〔父が、わたしの〕家に来るようにもなったけれども、来ると、やっぱり、隣近所の目がある。どうしても、見られたら嫌。見られたら、もしもなにかあったら嫌っていうことが、ものすごく強かった。だから、夜、暗くなって〔から〕、この病院と家を行ったり来たりする生活が、10何年か続いたです。だけど、わたしとのあれ〔＝やさしい言葉のやりとり〕は、全然なかった。ただ、来ても、「なにしに来たのか」って。《聞き手》そうすると、Bさんのお宅に、お父さんがたびたび遊びに来たっていうのも、だんなさんや、孫が、いい顔してくれるから？

《Bさん》はい。わたしが行けば、お互いに嫌なこと言う。突いてはならんことを、言うんですね。また、嫌なこと言ってたんです、わたし。「死ね」とかですね、「あなたの子どもだけが、わたし、こういうめにあった」とか、いろんなこと。

《Bさん》父が亡くなったときも、わたしは、お葬式には全然〔タッチしなかった〕。主人が全部してくれたんです。主人に対しては、ほんと、悪かったなと思ってるけど。

亡くなったとき、ほんと、もう、こんな幸せなことないよ、と思ったですよ。おかしいでしょう？ それがホンネですよ。ほんと、もう、ほっとしたの。これで、わたしも、まっすぐ向いていかれる。もう誰にも気兼ねせずに、自分で人生、歩いていける、これから幸せな生活ができる、とって。

父親が亡くなって 16 年がたつ現在、「自分がその立場になったときに、どんなつらかったらうかなと、いまは、そう思う」。それでも、「やっぱり、嫌」という気持ちを、ぬぐいきることができない。「ここ〔＝菊池恵楓園〕に入ってくる時も、“いや、また、ここになにしに来たんだろう” と思いながら、あ、ちょっと、お墓参りしてこないかんねえと思う。だから、半々なんですよ。嫌な親だけど、やっぱり親にはちがいない。ハンセン病という病気、昔だと、らい病という病気っていう、それが頭から〔離れない〕」。

《B さん》わたしも〔世間の人と〕一緒ですよ。やっぱり、父親を、偏見の目で見て。嫌な目で見てた。「あんたが来ると、うつるんじゃないんだろうか」「箸でも触られたりすると、うつるんじゃないんだろうか」っていうことが、小さいときにそういうことを、自分が味わってきてる。そして、初めて父を知ったときに、それが出た。

だから、〔ハンセン病のほんとうの意味を〕もう少し、早くわかってれば、わたしの人生も、もう少しちがってたんじゃないかなと。もうちょっとちがった人生を、父親に対して、じゃなかったのかなあって。

《B さん》〔わたしには〕その〔ほんとうの〕意味もわからなかった。ほんとにわかったのは、裁判が始まって、いろんな人と集まりがあって、A さんとか Y さんとかに会って。わたしみたいな人が〔他にも〕いるっていうことを聞いて初めて、うつらない病気っていうのがわかったんです。やっぱり、それまでは、ここ〔＝菊池恵楓園〕に来るのも嫌だし、父がわたしのところに来るのも、嫌だった。わたしもそういう目で、ずっと、いままで、〔父のことを〕見てたんだなぁと思うと、やっぱり、それが自分としてはいちばん情けないですね。

そして、ほんとにちゃんとした親だったら、昼でも連れてきて、ご飯食べに行ったり、いろんなことをしてもらえたんだろうって。自分がいちばんつらかったのは、親に対して、やっぱり、自分もその目で……。わたしもそうされたから。親戚はみんな、父がそういう病気であるっていうことを知ってて、わたし〔だけ〕が知らなかった。〔そして〕自分も、そういう父親を知ったときに、自分もその目でずっと見てきた。だから、やっぱり、父親に対しては、悪かったなって思うこともあるんです。

### 記憶の不確かさ / 「人間が怖い」感覚

B さんは、聞き取りの場面で、「わたしの言ってること、わかるかなぁ」という不安を、聞き手にたいし、しきりに洩らしていた。小さいころから親戚を「たらい回しに」され、「自分だけ知らされていない」状況のなか、「いつも、なんかすると、ひとり」でいた B さん。小さいころからの記憶には、「あとから」意味がわかったことも多く、また、いまだに「わからない」こともたくさんある。そのため、「生活史」を他人に「説明しにくい」という。

《Bさん》 どういういきさつで〔両親は〕結婚して、どういふふうにして、わたしを置いていったのか。親じゃないとわからないでしょ、そのときのいきさつは。ただ自分が小学校4年になるまで、あっちに行き、こっち行き、あっち行き、こっち行き、でしょ。母親〔のこと〕を気づいたのは、もう中学出るか出ないぐらいのとき。あ、この人が母親かなと思って。そしてまた、母親のところへ行ったら、こっちに〔行き〕。だけん、学校を出るまで、どっちの籍がほんとなのかって、自分で思ったですよ、わたしは。

学校卒業して〔就職するのに〕履歴書出しますよね。そのとき迷ったです、どこの住所を書くんだろうと思って。母親は、こっちでしょ。わたしはじいちゃんばあちゃんのところにいるでしょ。どっち書いたらいいんだろうと思って。ほら、〔わたしの〕保護者は母親じゃないから、じいちゃんばあちゃんだから。そしたら友達が、それじゃダメという。母親というのがちゃんというんだから、と。だけど、わたしとすれば、じいちゃんばあちゃんのほうが親代わりみたいだから、やっぱり〔じいちゃんばあちゃんの〕名前を書いて、出したんです。

自分でもわからないんですよ。親に、ちゃんとしたいきさつを教えてもらえてなかった。ものすごく嫌なんですよ、自分の過去っていうのが。あっちにやられ、こっちにやられ、どこが籍なのか。気づいたときには、親が、ハンセン病という病気。

《Bさん》 だから、幼いときって聞かれても、記憶が定か〔でないんです〕。誰かがちゃんとそばについて、こまかいときはこうだったとよ、ああだったとよって、言って聞かせる人というのかな、親というのが、いなかったから。パッと〔母〕親に会ったときは、ある程度成長して会ったでしょ。で、パッと父と会ったときは、もう、結婚してたでしょう。

自分でも、わからないときあるんです。小さいときのあれ〔＝記憶〕。小学校の4年生まで父親のとき、5年生から先は、母親のほうでしょ。だから、なんていうのかな、愛情というのが、わからない。自分は〔じいちゃんばあちゃんを〕親と思ってても、けっきょく、親じゃないからですね。そばに行っても、結局、冷たくされてたんだなと思うんですよ、いま思うと。普通だったら、抱っこしたりとか、手をつないで買い物に行ったりとか、そういう記憶があるでしょ。そういう記憶があんまりないんですよ。なんか、いつも部屋で、ひとりで、お絵描きしたりとか、なんかしてたような感じがするんですよ。

《聞き手》 学校行っていじめは受けなかったけど、学校で仲のいい友達というのもできてないのね？

《Bさん》 ないです。大人になってからも、ないです。人というのは怖いから。

《聞き手》 怖いっていう感じ？

《Bさん》 うん。

24 歳での再会のあと、父親が自宅を訪ねるようになってから、B さんは、過去のいきさつを知りたくて、何度も父親に問いかけたという。しかし、父親は、過去をほとんど語らなかつたようだ。

《B さん》「なんで、こういう病気になったのか？」って、父をずいぶん責めたです。父は答えてくれなかつた、死ぬまで。「わたしは小さいときに、親もいないし。なんで？」って尋ねても、なんにも答えてくれんとです。

《聞き手》〔長男が〕生まれたあとで、お母さんが「恵楓園にお父さんがいるよ」と言ったわけですね？

《B さん》はい、そうです。生まれて 1 歳なるかならないか、ですかね。だから、なんで、わたしに教えたのか、それもわからないんですよ。どういう意味だったのか。けっきょく、わたしに当てこすりなのか、それとも、父親が嫌だったのか。やっぱり、嫌だったんでしょうね。母親も、やっぱり、そういう目で見てたから、〔わたしが〕3 歳のときに……。母親というのはそういうもんだらうかなあと、たまに思うんですよ。自分の子どもを置いて、ほかの人と結婚するもんなんだらうか。自分では全然わからないんですよ。

自分の実の母親から、「あんたの親は汚い」とか、「うつる病気だけが、嫌いだった」とかって言われたのが、いま思うといちばん嫌だったですね。わたしは母親とは仲が悪かつたし……。実の親から言われると、自分の立場ってどこにあるんだらうって。

わたしを産んだのは、結局、自分で好きで一緒になって、それで。だから、病気ということも、「どこで知ったんだらうねえ、どこで聞いたんだらうねえ」って〔知りたかつた〕。

だから、そのいきさつを、父と会ったときに〔何度も尋ねた〕。〔はじめて〕子ども連れて行った〔あと〕何年かして、〔家へ〕父が来るようになったから。主人は勤めに行ってるでしょ。そのあいだ、わたし、聞くんですよ。聞くけど、〔父は〕教えてくれないんですよ。なんにも言わないんですよ。どういういきさつだったかも言わないしですね。なんで言わないのか。だけん、それだけが、いちばん、心残りだったなあって、いまだに思うんですよ。

### 嫁や婿には話せない / 父親のお墓が気がかり

B さんには、30 代の長男のほかに、30 代の娘が 2 人いる。幼いころから恵楓園に連れて行ったり、また、ひんぱんに自宅との行き来があつたことから、子どもたちは、後遺症の残る父親のことを、「自分のじいちゃん、そういうもん、とと思ってたみたい」。

《Bさん》〔娘たちは、自分の祖父がハンセン病だということを〕裁判があったときに、初めて知ったみたいです。裁判がありましたでしょ。そのときに、この恵楓園というのが〔テレビに〕出たでしょ。それまで、なんか、老人病院と思ってたそうです。《聞き手》〔恵楓園に〕遊びには来るけれど？

《Bさん》はい。恵楓園がテレビに大々的に出たときに初めて、ハンセン病というの出たときに、知ったそうです。娘が聞いたんですよ、「お母さん、じいちゃんもハンセン病ね？　なんかテレビで言ってるけど、恵楓園ってあそこの病院ね？」って。恵楓園ってというのは、老人病院と思ってたそうです。自分のじいちゃんも、顔かたちは、普通のじいちゃんばあちゃんとはちがうみたいだけど、そういうもんと思ってたみたいです。娘たちは、

だから、ほんと、孫たちには、会わせとってよかったなって思うんです。わたしも、そういうふうにして〔子どものときから父親に〕会ってたら、もう少し、やっぱり、ちがってたんじゃないかなあと思うんです。

長男も、子どものときに恵楓園を訪ねていた。しかし、なかなか、娘たちのようにBさんの前で「言葉に出しては、言わない」。

また、Bさんは、長男の妻や、娘たちの夫に話すこともしていない。「この近くの人みんな、そういう偏見をもってる方が多かったですからね。だから、言わないでいいことは言わない」。「なるたけなら、あまり父親のことには触れたくないっていうのが事実」だ。

《Bさん》嫁が知ってるか知らないか、わからない。やっぱり嫁の耳に入れたくない。もしも、なにかあったときに……。やっぱり、弱みを握られたら嫌という気持ちがあります。嫁には。

このように、「嫁や婿には話せない」状況のなかで、Bさんの気がかりのひとつとなっているのが、父親のお墓のことだ。

父親の遺骨は、いま、恵楓園の納骨堂に入っている。亡くなった当時、夫といっしょに、父親の実家へお墓の相談をしに行ったけれども、「だめ、と言われた」。父親のきょうだいは健在だが、それ以来、行き来はない。

《Bさん》〔亡くなった当時、父親の実家には〕わたしはもう、お嫁に行って姓もちがうし、わたしがあれ〔＝父の墓守を〕するわけじゃない、〔父も〕自分も親のところに帰りたいんだろう、だから、〔実家の〕墓に入れてくれて、相談したんですよ。そして、父親のきょうだいは、「自分のきょうだいに、らい病の人間がいるとわかると、自分たちも迷惑がかかるし、子どもたちにも迷惑がかかる」と言ったからですね。「な

ら、わたしはどうなるの？」って言ったんです。「わたしはお嫁にも行ってるし、自分の親の墓までは責任が持たれん」って。そしたら、「〔菊池恵楓園の〕近くだから、〔そこに〕納骨〔堂〕があるけんが、あんたが子どもだけけんが、あんたがみるのが、ほんとだ」みたいなことを言われたんですよ。だから、もう、主人が怒ってから、いっさい、もう……。亡くなってもう16年、〔父親のきょうだいは〕墓参りにも来ません。

そしたら、子どもたちが「お母さん。じいちゃんは、ここの納骨堂から、自分の家〔のお墓〕に帰ったら、わたしたちがお参り行かれんでしょう？」って。「きょうだいの人ダメって言いなるとだけけんが、持っていったら、〔じいちゃんが〕よけいにかわいそう。ここの納骨〔堂〕で預かってもらえれば、お母さん、それがいちばん幸せだ」って、子どもが言うからですね。「そうね」っては言ってるんですけど。

やっぱり、いちばん気がかりなのは、わたしはお墓参りに来れるけど、自分が亡くなったあとにどうなるかって、そういうこと。